



きになる!
きになる!

きなるの郷

下北山村の文化財

下北山村教育委員会



下北山村の「文化財」…………… 2・3
 きになる！下北山村の文化…………… 4
 きになる！ゆかりの人々…………… 5
 きになる！前鬼の文化財…………… 6・7
 きになる！池原の文化財…………… 8・9
 きになる！池峰の文化財…………… 10
 きになる！寺垣内の文化財…………… 11
 きになる！浦向の文化財…………… 12
 きになる！佐田の文化財…………… 13
 きになる！上桑原の文化財…………… 14
 きになる！下桑原の文化財…………… 15

もっときになる！人へのオススメ

・下北山村歴史民俗資料館
 (図書コーナーには郷土資料も充実しています。特に「下北山村村史」はお勧めです。)

「きになる！きなるの郷 下北山村の文化財」第1版
 発行：下北山村教育委員会
 奈良県吉野郡下北山村寺垣内 983 番地
 TEL 07468-6-0901
 発行日：2022年2月1日
 制作：合同会社ココトソノ制作室

よくなる！

下北山村ってどんな村？

下北山村は、奈良県吉野の紀伊山地の山奥、北山川沿いの山間部にあります。1000年以上前に、山岳信仰「修験道」の人々が修行のために訪れるようになり、集落ができました。安土桃山時代に良質の木材の産地として認められて以降、特に江戸時代から昭和の後半ごろまで、大変林業が栄えたところです。

山間部の印象が強い下北山村ですが、実は和歌山県新宮市や三重県熊野市などの海沿いの都市から近く、今なら熊野市まで車で一時間もかかりません。奈良県に属しながらも、生活文化圏は和歌山県・三重県側にあるのが特徴です。



下北山村の文化財

文化財とは、人間の文化的活動によって生み出された、歴史的・芸術的・学術的価値が高いものことです。建築物や美術工芸品などの形あるものはもちろん、踊りや歌のような形のないものも文化財ですし、「他の場所にはない自然の風景」なども、人に価値が見出されることにより文化財になります。

下北山村は特に、修験道や林業を中心とした山の生活がどのようなものだったのかを伝える「民俗文化財」と、自然が作り育ててきた生物・植物・景勝地などの「(天然)記念物」が多いところです。

この冊子では、下北山村にある8つの地区ごとに、文化財を紹介していきます。

◎国指定史跡

- ・大峯奥駈道

◎県指定文化財

- ・前鬼のトチノキ巨樹群

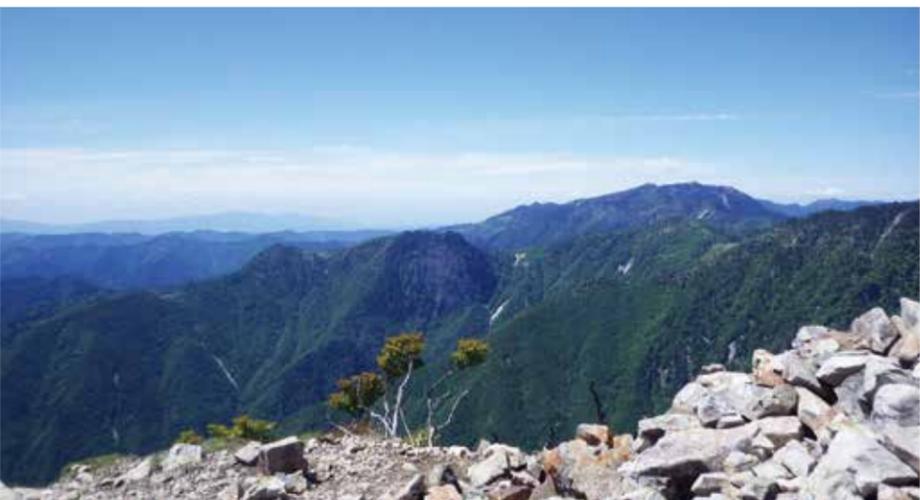
◎村指定文化財

- ・夫婦杉
- ・親子杉

希少な自然・生物を保護するため、下北山村は次の一部にも含まれています。

- ◎吉野熊野国立公園
- ◎ユネスコエコパーク「大台ヶ原・大峯山・大杉谷」

世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道



「続日本百名山」にも選ばれた釈迦ヶ岳からの展望。大峯奥駈道は釈迦ヶ岳の山頂を通る。

平成16(2004)年、紀伊山地の霊場「吉野・大峯」霊場「熊野三山」、霊場「高野山」と、それらをつなぐ参詣道が、ユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録されました。

奈良県・三重県・和歌山県の三県にまたがる登録範囲のうち、下北山村に含まれるのは、山岳信仰である修験道の行者たちが一週間かけて踏破する修行の道「大峯奥駈道」の一部です。

「大峯奥駈道」の近くには、行者たちが礼拝や修行を行うための「靡なま」と呼ばれる霊場が75カ所※あります。下北山村にあるのは18番目から42番目までの計25カ所です。特に下北山村の前鬼地域は、集落そのものが29番目の靡であるだけでなく、周辺に多くの靡があり、「奥駈けの心臓部」ともいえる場所です。

※「靡」は古くは120カ所ありましたが、75カ所に整理されました。

世界遺産とは

昭和47(1972)年に採択された世界遺産条約に基づき、どの国、どの時代、どんな信仰や価値観の人でも素晴らしいと感じられる「顕著な普遍的価値」をもつ建造物や遺跡、景観、自然をリストアップしたものです。人類共通の財産として、定期的に保全状況を確認して守り伝えられます。

日本遺産

森に生まれ、森を育んだ 人々の暮らしとこころ 美林連なる造林発祥の地吉野

平成28(2016)年、吉野町、下市町、黒滝村、天川村、下北山村、上北山村、川上村、東吉野村の8町村から成る日本遺産「美林連なる造林発祥の地」が認定されました。

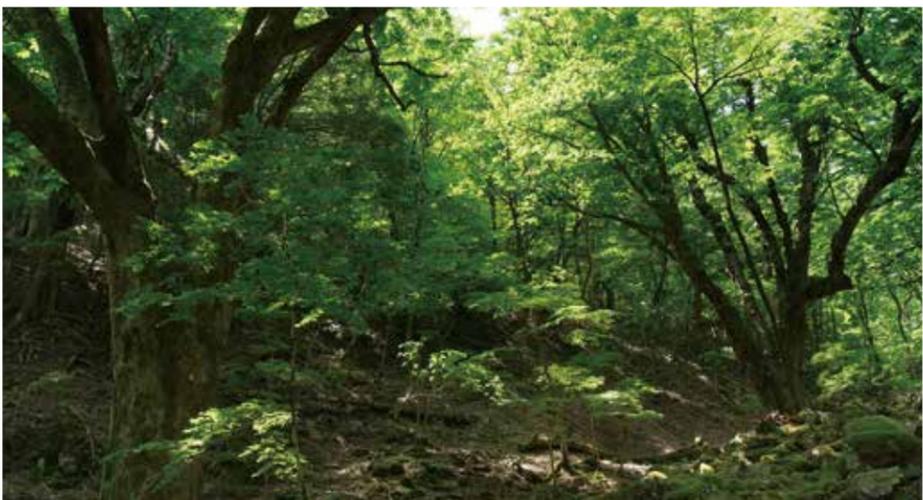
約500年にわたる造林技術によって育まれた人工林と、神仏が坐す地として残された天然林が共生する奈良県吉野地域。そこでは、造林と製材の技術を生業とし、田畑が少ない山で暮らす人々ならではの文化が生まれました。

この日本遺産は「森と共生の文化」「森と信仰の文化」「森と暮らしの文化」の三つの視点で、吉野地域を紹介するストーリーになっています。

下北山村からは「前鬼のトチノキ巨樹群」「池神社と親子杉・夫婦杉」「前鬼集落跡」「春まなのめはり寿司」が構成要素として登録されています。また、吉野杉の加工技術の一つとして「割箸製作技術」があります。村内で割箸製作も行われています。

日本遺産とは

日本遺産は、地域が提案し、文化庁が認定するものです。その地域の歴史や文化の説明と、それを裏付ける食生活・遺跡・文化財などが一つのストーリーにまとめられています。地域の特色を知りたいときや、訪れる人への説明などに活用できます。



前鬼のトチノキ巨樹群。巨樹群から得られるトチの実は、田畑の少ない地域の希少な食料になる。

下北山村の文化

さになる!

北の！ 下山の！ 食文化

とちの実ととちもち



とちの実 (左：果皮付、右：剥いたもの)

平地が少なく、稲作に不向きな下北山村では、とちの実からつくる「とちもち」は貴重な食料でした。秋になると自然に落ちる実を拾い集め、水にさらし、天日干しし、皮を剥いてあく抜きをして、もち米と一緒に蒸してついで餅にします。手間暇をかけた伝統食です。



とちもち



めはり寿司



下北春まな

下北春まなとめはり寿司

めはり寿司は、漬物や味噌などを混ぜ込んだごはんを、青菜の漬物でつつんだものです。下北山村では「下北春まな」で作ります。下北春まなは、葉が肉厚で柔らかく、下北山村の気候でなければこの味に育ちません。旬の季節は葉をゆでて、それ以外は塩漬けにした葉で作ります。日々の食事や、お弁当にも使われる身近なめはり寿司は、来客のもてなしにも喜ばれます。

北の！ 下山の！ 植物・生物

人間の採取や、鹿による食害などで、絶滅の危機に瀕している植物・生物があります。下北山村に生息するコサナエトンボは、奈良県希少野生動物植物に指定されています。



イワチドリ



キイジロウホトトギス



ナンパンギセル



コサナエトンボ

北の！ 下山の！ ことば (方言)

ここでは下北山村地域独特の言葉を紹介しします。

やれよよ ▼ 他人に対しては「あれまあ」 自分に対しては「しまった」

例「やれよよだーしよかいにや」

ちりきる ▼ 飛ばして行く

例「あの車ちりきってったぞー」

きんとべ ▼ 几帳面

例「どえらいきんとべやにや」

下北山村や奥吉野一帯には、他の近畿地方とは異なる特有のイントネーションがあり、「言語島」と呼ばれています。聞き比べてみましょう。

北の！ 下山の！ 北山の子守唄

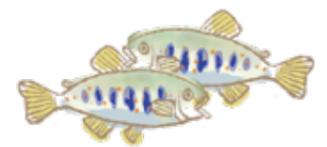
昭和30〜40年代ごろに、奈良教育大学の牧野英三氏によって寺垣内地区で採譜された子守歌です。「こうって寝れ」は赤ちゃんのいびきの形容、「ねしよ」は女の子のことです。

泣くな泣くな 泣くなよ
泣いたら とんびにつままれる
泣いたら 小鷹につままれる
こうって寝れ こうって寝れ こうって寝れよ
寝れ寝れ ねしよの子
起きれ起きれ 男の子

北の！ 下山の！ 釣りと魚

川の美しい下北山村は川魚の宝庫です。昔から老若男女をとわず、食材の確保と楽しみを兼ねて魚を捕りました。池原ダムができるまでは、エブロンを川に下ろし、しばらくして引き上げるだけで捕れたほど魚がいたそうです。

池原ダムができてからは、ブラックバス釣り大会や、釣りを通してマナーを学ぶ子ども向けフィッシングスクールを開催するなどして来村を呼びかけ、今では池原ダム湖はブラックバス・フィッシングの名所として全国に知られています。



修験道の開祖とお供になった鬼、その子孫たち
役行者と前鬼・後鬼
飛鳥時代



「役行者を継ぐ行者」と仰がれた行者
実利行者
江戸時代(天保年間)
明治17(1884)



大正モダン建築の設計と文化学院創立
西村伊作
明治17(1884)
昭和38(1963)



日本を代表する「現代かな書」の第一人者
杉岡華邨
大正2(1913)
平成24(2012)

修験道は、山岳地帯での修行と神道・仏教が融合した、日本古来の山岳信仰です。村の伝承では天武天皇が治めた白鳳時代(約1350年前)に、役行者が下北山村と十津川村の間にある釈迦ヶ岳周辺を修行場として開山したのが、大峯奥駈修行の始まりとなっています。

自然に身を投げて神通力を得る「捨身入定」という修行を実践した、最後の修験道の行者です。天保年間末に岐阜県で生まれ、25歳のころに前鬼地域の5坊の一つ、行者坊の五鬼熊義真氏に弟子入りしました。

明治17(1884)年生まれ。大正自由教育の教育者、大正モダン建築設計者として名を残す文化人です。和歌山県新宮市の大石家に生まれましたが、母の実家である上桑原の西村家の養子になりました。

大正2(1913)年、下池原生まれ。本名は正美といい、華邨は書家としての雅号です。「かな文字」の古典を徹底的に研究し、文字の形や大きさ、文字のつながりの流麗さ、線や墨の強弱など、様々な筆の表現を追究し、書家として新たな「かな表現」を創出しました。大学で指導をしたり、研究成果や指南書を出版するなど、研究者・教育者としても活躍し、書道界に大きな功績を残しました。

下北山村 歴史民俗資料館
村の歴史や、村にゆかりある人物の紹介、生活や生業、祭祀の道具などを展示し、村の暮らしや昔の様子がわかるようにした施設です。
建物の正面玄関と、入って右にある会議室は、村育ちの設計者だった西村伊作氏が大正14(1925)年に設計した旧桑原病院を移築したものです。



下北山村歴史民俗資料館の外観

所在地 下北山村上桑原 885-11
電話 074681610901
(下北山村教育委員会)
開館日 木曜
※開館時間の変更があります。
〔来館の場合は教育委員会まで〕連絡先
入館料 無料

ゆかりの人々

さになる!

▼修験道と宿坊 (P7)

▼行者の滝 (P12)

▼下北山村歴史民俗資料館 (このページ下)

▼杉岡華邨記念館 (下北山温泉「きなり館」内)

前鬼の文化財

大きくなる!



前鬼地域は、国道169号にある前鬼口から12kmも離れたところにあります。世界遺産・大峯奥駈道の近くの原生林に囲まれた小さな平地で、修験道の行者のための宿坊があります。



前鬼川は、修験道では水垢離（水で体を清めること）の行場となっており、不動七重の滝のほか、不動滝や三重の滝などの名瀑も多く、山歩きや沢登りをする人々にも知られている。



前鬼集落跡の石垣



坊跡へ続く階段

前鬼集落跡

前鬼集落は役行者の弟子である前鬼・後鬼の5人の子どもの子孫たちが、宿坊を営みながら、修行する人々の世話をしてきた場所です。奥駈道の29番目の扉（行場）でもあります。明治時代まではこの行政区域にも属していませんでしたが、明治5（1872）年に吉野郡に、明治22（1889）年に下北山村に編入されました。現在は一年中住む人はなく、最後の宿坊である小仲坊が週末に営業するのみです。



行者堂

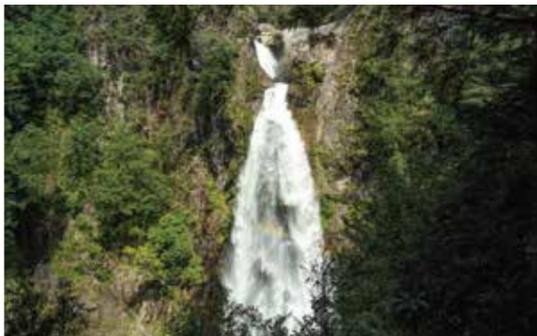
前鬼のトチノキ巨樹群

前鬼集落から「太古ノ辻」方面へ2kmほど登った所にあるトチノキの巨樹群です。幹回り10mを超すものもあります。平地が少なく農耕に向きで、他の集落から離れ、物流の少ない前鬼集落では、巨樹が落とすトチの実が貴重な食料にもなりました。

「日本遺産吉野」の構成要素であるほか、平成13（2001）年には、県の天然記念物に認定されています。



トチノキの巨樹



展望場から見た不動七重の滝



滝の水が流れ込む前鬼川

前鬼不動七重の滝

高さ160mほどの七重の段瀑で、平成2（1990）年の「日本の滝百選」にも選ばれています。前鬼口から前鬼集落に向かう途中の車道沿いの展望場からも、緑に彩られた断崖を豪快に流れ落ちる、絵画のように美しい滝の姿がよく見えます。

展望場から続く森林遊歩道を6kmほど歩いて、滝つぼに近い大滝展望台に向かうこともできます。草木が茂りやすい場所のため、長袖・長ズボン、手袋を着用して訪れてください。

修験道と宿坊

修験道は皇族・貴族などにも崇敬され、全国から多くの行者が集まりましたが、明治政府による修験宗廃止令などにより、一時は前鬼に訪れる人が絶えました。宿坊を維持することは大変なことですが、5坊あった宿坊は、現在は小仲坊の1坊のみとなりました。小仲坊61代目



宿泊所の外観



宿泊所の内観

ほかに

コレも前鬼の文化財

- 大峯奥駈道
- 三重の滝
- ミツマタ群落

池原の文化財

きになる!

元は役師が多く住んでいた地域です。池原ダム建設の際に人口が増え、当時は繁華街のような場所でした。下北山スポーツ公園があり、その中には温泉や宿泊施設・キャンプ場があります。



pick up

ダムと観光の歴史

ダムの建設が終わると、仕事がなくなった人々は村から去り、人口が減ってしまいました。そこで新しい産業として力を入れたのが、観光開発です。

大正から昭和にかけて、日本全国で電力会社と水力発電所・火力発電所が作られました。池原ダムは昭和39(1964)年に完成した水力発電のためのダムです。高さ111m、長さ460mのアーチ式のダムで、貯水容量と湛水面積ともに日本最大級です。ダム建設は下北山村の風景と文化

池原ダム



平成の森コテージからの池原ダム遠景

を大きく変えました。このダムを作るために、前鬼口、音枝、大瀬地区が水没しています。建設資材を運ぶために橋やトンネルが作られ交通網が充実し、物流も変わりました。素朴な生活をしてきた林業の村に、近代的な文化や新しい食生活が浸透したのです。

池原大橋

「フナドの渡し」と呼ばれる渡し舟があった場所に、昭和4(1929)年6月30日に架けられたのが池原大橋です。発電施設建設のための道路拡張とともに設けられました。これにより、川の水量や天候に影響されることなく、池原地区と対岸の池峰方面の地区を行き来できるようになったのです。

平成15(2003)年に大改修されましたが、トラス構造の橋桁など、主要な部分は昔のままです。



池郷川の河原から見た池原大橋



池原ダム湖

吉野熊野国立公園内の村であることを生かし、自然の中でスポーツや野外体験をしてもらおうと、池の平公園を整備し、ダム建設でできた廃川敷にスポーツ公園を建設。グラウンドやキャンプ場などを整えました。公園内と池郷川沿いには桜を植え、春に訪れる人々の目を楽しませます。ハイキングに、川遊びに、キャンプに、釣りにと様々な楽しみ方ができる行楽地になりました。



展望スポットから見た石ヤ塔

石ヤ塔

奇岩・奇石が塔のようにそびえ立つ、下北山村の景勝地です。長方形を積み上げたような岩々の外側のブロックが崩落して、一部だけ残ったものが林立しており、まるで石塔群のように見えるのです。秋は常緑樹と紅葉で彩られ、霧の日は、自然が作り出した無数の石塔が、白い霧の中に浮かびあがる幻想的な風景になります。

池郷川沿いの池郷林道を約6kmすんだところに展望スポットがあります。観光の際は、道路状況を役場に確認ください。



普門寺伽藍再建記念碑



六地藏



普門寺本堂

普門寺

北山川の北岸の山の中腹に見えるのが普門寺です。曹洞宗、兵庫三田市心月院の末寺で、創建年は不明ですが、明治時代の史料では、江戸時代、寛永元(1624)年の開山となつています。

江戸時代、寺は信仰の場所でありながら、地域の人々や情報が集まる場所でもありました。文久3(1863)年に、江戸幕府を倒そうとした天誅組が下北山村に逃げた際、村人が集まって対策を検討した場所です。また、明治時代にはじめての戸長役場(村役場)になった場所でもあります。



池原稲荷神社の社殿

稲荷神社

稲荷神は五穀豊穡・商売繁盛の利益があるとして信仰された神です。江戸時代には日本全国各地や屋敷に稲荷神社を勧請することが流行しました。

下北山村でも、江戸時代にあちこちで稲荷神社が建立されています。下北山村最大の稲荷神社が池原のもので、文化元(1804)年4月7日、当時の池原村が京都伏見の愛染寺から勧請しました。



池原郵便局旧舎外観

池原郵便局 旧舎

現在の上池原郵便局舎の向かって右側にあります。大正12(1923)年3月に局舎が建てられました。窓は縦長で、ペンキ塗りされた外壁は横板を下から重ねながら貼った下見板張り、玄関部分には本屋根とは別に庇をつけてポーチにした洋風建築です。昭和43(1968)年に現在の局舎に移りました。

ほかに

コレも池原の文化財

- アメドマリの滝
- 音無の滝
- 小又川水力発電所

池峰の文化財

池神社と明神池がある地区。山林にかこまれ、古くから林業がさかんです。昭和39（1964）年に池の平公園が作られ、歴史的な文化財と近年の娯楽文化が共存しています。



明神池北岸から見た池神社



池神社と明神池

池原大橋から池原坂（池ノ坂）を上った峠のあたり、林の中に美しい池と神社の赤い鳥居が見えます。池神社と明神池です。

天武天皇の時代、役行者の創建と伝わります。役行者が水神の怒りを鎮めて祀った、役行者が池に卵を投げ入れたら白龍が現れたなどの伝承が残っています。本殿とは別に、池沿いに明神池の遥拝所があります。本殿の御祭神は市杵嶋姫命（弁天様）です。雨乞いのご利益で知られ、尾鷲や熊野などの村外の人々も雨乞い祈願に訪れました。また、明治までは修験道の行者の参籠所でもありました。

ほかにコレも池峰の文化財

- 夫婦杉と親子杉（日本遺産吉野、村指定文化財）



池の平ゴルフ場フェアウェイ

池の平ゴルフ場

池神社の近くに作られたゴルフ場です。池原ダムの建設の際に電源開発（株）の職員が作ったもので、昭和41（1966）年に村が買い上げ、池や宿泊所を造り、池の平公園として整備しました。

ゴルフ場としては昭和32（1957）年開場の奈良国際ゴルフ倶楽部（奈良市）について県下で2番目に古い歴史を持ちます。

pick up 池神社と禊屋

村の氏神である池神社には、神社を支える「禊屋」と呼ばれる制度があります。各地区から地域の代表を一名を選び、毎月一日、十五日には池神社にお参りに行きます。お祭りのときは、掃除をし、お餅やお酒を供え、地区の人々の安全と無事を祈ります。このとき供える米は砂糖を入れた甘いごはん（「一夜づくり」と呼ばれます。禊屋と稚児の衣装は、下北山村歴史民俗資料館（P5）で見ることが出来ます。



池明神境内

寺垣内の文化財

きになる!



正法寺本堂



実利行者の社



梵鐘



寺垣内地域はココ!

村役場がある地区で、戦後は診療所や簡易水道などの公営施設がいち早く作られました。下北山村の中心地でもあります。

住吉神社

創建年は不明ですが、安土桃山時代の文禄4（1599）年の記録があるので、そのころまでにはあったようです。池神社の分身等の伝承があります。祭神は八幡大神（応神天皇）です。祭りは以前は旧暦の12月19日でしたが、現在は11月13日ごろに、寺垣内地域が中心となって執り行っています。



参道入り口



住吉神社社殿

pick up 下北山村の山の神

山の神は山祇ともいい、特に林業の盛んな地域で祀られます。下北山村でも地区ごとに山の神の社が建てられ、林業に携わる人々は正月7日、木材を切るためのヤマイリの日、木材を売った日、11月7日の山の神の日と、ことあるごとに榊や酒をそなえ、おまいりし、酒盛りをしました。

紀伊山地の一端では、山の神は女神と考えられており、山の神のかんざしと呼ばれる「ケズリバナ」や、男根を模した木の作り物が供えられました。今はその風習はなくなりましたが、住吉神社境内の山の神の社に、昔作られたものが残っています。



『下北山村史』（1973年）より

しょうぼうじ 正法寺

現存する下北山村最古の寺で、曹洞宗・熊野市安楽寺の末寺です。南北朝時代、後醍醐天皇の皇子・護良親王は、北朝から逃れ下北山村に入りました。護良親王の御座所として恵日院を建てましたが、忠臣・戸野兵衛が建武2（1335）年に現在の場所に移し、華清山正法寺としたのが寺の始まりです。現

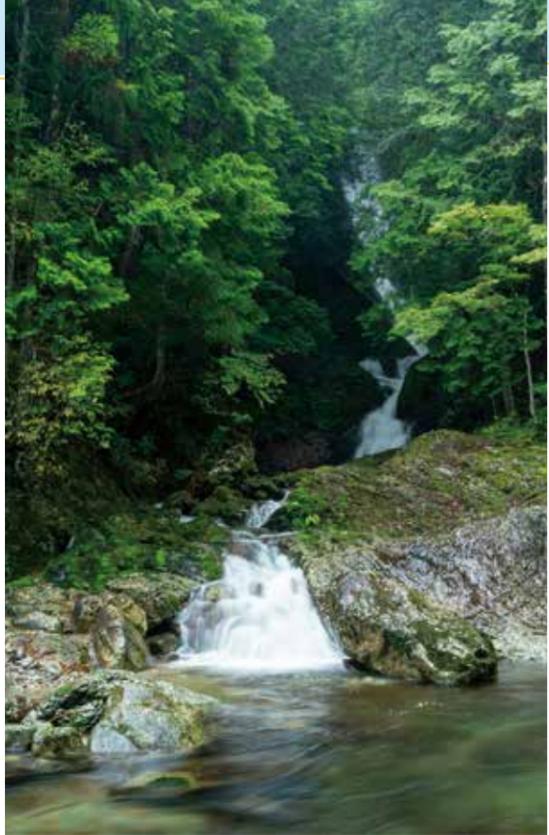
在の本堂は享保3（1718）年に再建されたものです。幕末には、江戸幕府を倒そうとした天誅組が下北山村に逃げてきた際、宿舎として使用しました。山門は天明2（1782）年のもので、扉に天誅組の浪士が突いた槍跡が残っています。このほか、境内に実利行者を祀った社があります。

浦向の文化財

きになる！

！ 行者の滝

実利行者の修行地にある滝です。浦向地域から、奥地川沿いの国道425号を2kmほど奥にいくと、実利行者の分骨碑の向かって左に、川に下りる場所があります。その川向こうにある50mほどの段瀑です。エメラルドグリーンの清流が輝く奥地川の向こう、木々の隙間から山の水が岩肌を伝うように白く落ち、合流



対岸から見た行者の滝

不動峠から和歌山へ向かう場合の南西の玄関口です。佐田・寺垣内と同じ地域でしたが、江戸期に分離しました。林業がさかんな頃は伐採した木を出す職人が多く住みました。

します。修験道には、水垢離といって、水行や滝行で心や体の「垢」を身から離して清め、精神を統一する修行があります。今も実利行者の弟子の子孫の方々が大切に守っている信仰の場所です。敬意を持って訪れ、汚すことのないようにしましょう。



分骨碑

！ 実利行者分骨碑

実利行者は、捨身行を日本で最後に行った人物です。肉体を自然の中に投げ、自然と一体化するかわりに、その靈魂に現世で生きる人々を救うための神通力を得ることができるといふ、修験道の最高の秘法です。行者の滝に降りる手前の平地に、シャクナゲに囲まれた実利行者の分骨碑があり、毎年4月21日の命日の日に行者祭りが行われます。

佐田の文化財

きになる！

比較的平地が多く、農地に恵まれているのが佐田地区です。木材の伐採や製材をする人々が多く住んでいました。石垣が多く、風景としても見どころがある地域です。



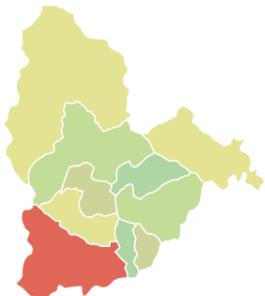
魔利支天王のほか、玉置神社の木札なども祀る社

！ うい山の天王

明治時代に実利行者が背負っていた神像を請い受けて祀った神社で、テンノサンともいいます。御神像は猪にまたがった神様の姿をしており、摩利支天と考えられます。テンノサンは摩利支天王に由来するものでしょう。



うい山にありましたが、現在は遷宮し、佐田公民館前のバス停向かって右の道を上がったところの広場に遷されました。狸や狐が大入道に化けて通行する人を迷わせたために祀ったという伝承が残されています（畑を荒らす猪を封じるためという説もあります）。祭りはイノコサンと呼ばれ、毎年春に行っています。



浦向地域はココ!

ほかに 浦向の文化財

- 戸野兵衛の墓
- 山の神

山村留学について

pick up



山びこ寮と子どもたち

昭和63（1988）年から平成24（2012）年まで、下北山村には他地域の子どもたちを寮で受け入れる「山村留学」の制度がありました。寮では、寮長・寮母さんが、料理や洗濯をしたり宿題を見てあげたりと親代わりになって、面倒を見ました。村内の子どもたちにとっては、村外の子どもとふれあえる新しい交流の機会でした。寮の建物は改装され、現在「下北山村ワークスペースBAYOR」になっています。

大切な生業、林業

pick up



山林風景

下北山が林業を生業とする地域となったのは、安土桃山時代、豊臣秀吉の時代です。それまでの下北山村は、政変に敗れた権力者の落ち延び先となる、隠れ里のような位置づけでした。しかし、天下を統一した豊臣秀吉によって、全国で検地が行われ、下北山村は良質な材木を産出する土地として、豊臣秀吉の所轄となりました。下北山村は伏見城にも使われています。江戸時代になると徳川將軍家の直轄地となり、年貢は「木年貢」として木材を納めました。江戸城でも使われています。

北山村は、吉野材に比べ、目のつまりが少なく、柔らかい代わりに太いものが多いのが特徴です。

！ 割箸製作技術



いろいろな割箸

丸太から柱や板を作る行程でできた端材も、桶や割箸づくりに余すことなく利用されました。木の性質を生かす高い技術は、日本遺産吉野の構成文化財の一部になっています。吉野産のまっすぐ育てられた良質な材から作られた割箸は、手触りがよく、気持ちよく割れ、香りも高く、食事を楽しくしてくれます。

上桑原の文化財

かみくわはら

神武天皇
遥拝所

上桑原の中央の八計地山(通称・中山)の頂上に、「遥拝所」と彫られた石と、1mの台座石があります。神武天皇遥拝所です。地元では「じんむさん」と呼ばれ、かつては毎年4月3日の神武天皇祭ではお祭りも行われていました。神武天皇が東遷北上の時、ここで休憩されたという言い伝えがあります。



「遥拝所」と彫られた石



オオカメ社殿

オオカメ社
(川辺神社)

オオカメは狼のこと。田戸の林家の先祖が狼に襲われ鉄砲で殺したあと、その霊を慰めるために祀った社です。二ホンオオカメは明治38(1905)年に、奈良県東吉野村で捕獲されたのが最後に絶滅したと言われていますが、それ以前には下北山村にも多くいたようです。下桑原の小口の人が、猪に畑が荒らされぬようオオカメ社で神を上げて祈ったところ、その神を立てなかつた田は猪に荒らされ、神を立てた田は無事だったという伝承が残っています。

下北山村の人々は、昔から日々の必需品などを、三重県の熊野や和歌山県の新宮と行き来することに、まかなってきました。上桑原は南の玄関口といえるところです。



地蔵堂

不動峠地蔵堂

北山川の downstream、和歌山県北山村七色と下北山村の間にあるのが、不動峠です。この道は、和歌山への生活道であり、筏師が七色で筏を渡したあとに帰る「筏師の道」でした。峠を通る人々を見守ってきた地蔵堂は朽ちていましたが、令和2(2020)年、村内外による浄財、クラウドファンディングなどによる支援を受け、新しいお堂ができました。



上桑原地域はココ!

pick up

不動峠の地蔵堂の前には、戦後の頃まで茶屋がありました。木材を筏に組み、命がけて北山村の七色方面へと運んだ筏師たちは、「今日も無事に仕事を終えた」とほっと一息、茶屋で息をついたことでしょう。七色の先の新宮は北山村の取引が行われる、下北山村から近い大きな海沿いの町。塩や魚などの買い物にも峠は使われました。不動峠と筏師が忘れられないよう、近年しばしば「不動峠を歩く会」が開催されています。今は新宮・熊野方面には車でさっと移動できますが、昔に思いを馳せながら、歩いてみるのもいいかもしれません。



クラウドファンディングで使ったイラスト

下桑原の文化財

しもくわはら

桑原の地名の由来とされる桑原氏は、南朝の忠臣で、熊野の荘園を管理していた「熊野八莊司」の一族だったという説があります。熊野と下北山村の関係が感じられます。



瀧巖寺本堂



瀧巖寺

曹洞宗、兵庫県三田市心月院の末寺で、覚雄的和尚が開山しました。創建年は不明ですが、明治時代の史料では、江戸時代の寛永10(1633)年の開山となっています。本堂は正12(1923)年に修築されたもので、本尊は、過去・現在・未来の仏(阿彌陀如来・釈迦如来・弥勒菩薩)の三体並列形式です。鎮守は『天満大自在天神』菅原道真公です。桑原の地名の由来とされる桑原氏は、菅原道真公の子孫であったと伝わっています。



瀧巖寺本尊

ほかに

上桑原・下桑原の文化財

- 小井のお薬師さん
- 乳銀杏
- 下北山村歴史民俗資料館
- 莊司の宮(庄司大明神)



七色ダム湖に沈む建屋

摺子発電所跡

摺子発電所は、昭和6(1931)年に竣工した、下北山村初の水力発電施設でしたが、池原ダムができたことにより役目を終えました。摺子発電所の建設当時は、まだ材木を筏師が運んでいた時期で、発電用の水路以外に、筏を通すための落筏路が備えられていたのが特徴的です。現在は七色ダムのダム湖に、緑に覆われかかった発電所の建屋が半分沈んだ状態で見えており、まるで湖に浮かんでいるようで、廃墟ファンの間で有名なスポットになっています。



落筏路

pick up

水没した小口集落について

小口集落は下桑原の最南にありました。多くの住民が林業に従事していましたが、和歌山県の七色ダムの建設に伴い水没することになり、全32戸が転居しました。

現在下桑原にある庄司大明神は、もともと小口にありましたが、ダム建設のため1967(昭和42)年に遷宮しました。祭神は大山祇大神です。神社の名前の由来は、桑原の地名の由来になった熊野の荘園を管理者「熊野八莊司」の莊司を祀ったためという説と、川口庄司という落ち武者の刀を、御魂代として奉祀したためという説があります。



水没前の小口集落